

『節用集』と『日葡辞書』

今 野 真 二

要旨 いわゆる古本節用集は室町時代中頃に成り、『日葡辞書』は一六〇三年に成立している。ちかい時期に成ったこれら二つの辞書体資料は、室町時代の日本語の観察に使われることが少なくない。特に『日葡辞書』は見出しとして採用した日本語をアルファベットで書いているために、漢字や仮名で書いた場合にはわからない発音がわかる文献として重視されてきた。

標準語形の周囲を（場合によっては）複数の非標準語形がとりまいているというモデルを考えた場合に、非標準語形をどの程度辞書体資料が見出しとするかは、当該辞書体資料の編纂者、編纂目的等によって異なることが推測できる。そうであれば、『日葡辞書』がつねに「万能」ということにならないかということでもない。

『節用集』は（必須ではないにしても）見出しとして採用している漢字列に振仮名を施すことが多い。その振仮名は、書写原本のそれを踏襲することもあるが、書写者が自らの発音に基づいて施すこともある。『節用集』の振仮名は多様で、当該時期の非標準語形が振仮名として施されていることが少なくないことを具体的に指摘し、『日葡辞書』と『節用集』とを併せて観察することが室町時代の日本語研究には必要なことを指摘した。

キーワード・文字化・標準語形・非標準語形

はじめに

『節用集』の成立を室町時代中頃と考え、江戸時代に刊行された「近世節用集」とそれ以前に成った「古本節用集」とを分けて考えることにする。本稿では、古本節用集を観察対象とするので、以下では古本節用集を単に節用集と呼ぶことにする。

『VOCABULARIO DA LINGOA DE IAPAM com a declaração em Portugues』（ポルトガル語の説明を付したる日本語辞書）という題名の辞書は『日葡辞書』と呼び慣わされてきているので、本稿でもその『日葡辞書』という呼称を使う。『日葡辞書』は一六〇三年に、日本イエズス会によって刊行され、翌一六〇四年に、その補遺の部が出版されている。本稿では「本篇」「補遺の部」を併せて扱い、必要があればそれぞれの別に言及する。

『日葡辞書』の編集に日本人信者が協力していることはすでに指摘されているが、同辞書がおもに、（ポルトガル語を母語とする）イエズス会宣教師の日本語理解のために編まれていることはいうまでもない。したがって、ちかいつ時期に編まれた辞書体資料ではあっても、両辞書が編まれた目的は異なる。そのことを承知した上で、両辞書の「違い」をいうならば、「見出し」に「違い」があるといえよう。

節用集は漢字列を見出しとして、それに振仮名を施す。振仮名を含めていえば、「漢字列＋振仮名」を見出しとしていることになる。語釈は配置されないことが多い。一方、『日葡辞書』は見出しとなっている日本語をアルファベットで示し、それにポルトガル語によって語釈を付す「日本語ポルトガル語対照辞書」の形式を採る。『日葡辞書』においては見出しとなっている語がアルファベットで書かれているために、漢字や仮名で書いた場合には判然としない発音についての手がかりが得られることがある。また、『日葡辞書』は「はなしことば」「書きことば」にわたり、「本篇」「補遺の部」とを合わせて、三万二千を超える語を見出しとしている。一方節用集の見出し数は、例え

ば、黒本本でいえば七四二八⁽¹⁾で、『日葡辞書』の見出しの四分の一程度ということになる。節用集の見出しは漢字列であると思われるので、どちらかといえば「書きことば」を見出しにしていることが推測できる。

そのように、両辞書にはさまざまな「違い」があることがわかつているが、本稿では両辞書を対照し、おもに節用集の見出しから、どのような知見を得ることができるかということについて考えることを目的としたい。

一 清音、濁音をめぐる語形について

『節用集』が成立した室町時代中頃の日本語の表記システムにおいては、語に含まれている濁音を、それにあてられている仮名に濁点を附すことによって明示することは十分に行なわれていなかった。漢語「洗濯」を「センダク」と発音することがあったことは、一五九三年に天草で出版された『エソポのファブラス』中の「すみたきと洗濯人のこと」において「洗濯人」が「xendacuin」と綴られていることによって明かになったといつてよい。「センダク」と発音されている語をアルファベットを使って文字化した場合、漢字はいうまでもなく、仮名では表示しない（ことがある）第三拍目の「ダ」が明示的に文字化される。しかし『エソポのファブラス』の編纂にかかわったポルトガル人キリスト教宣教師が日本語の濁音を明示することを目的にしてアルファベットで日本語を文字化していたわけではないことはいうまでもない。

アルファベットによる文字化の、いわば「特性」によって、日本語に含まれている濁音がわかるということはあるが、例えば辞書体資料である『日葡辞書』についていえば、当然のことであるが、そもそも見出しとして採用していない語を『日葡辞書』に見いだすことはできない。『日葡辞書』が濁音を含まない語のみを見出しにしているからといって、濁音を含む変異形が当該時期に存在していなかったという「証明」にはならない。右の例を使って説明すれば、『日葡辞書』は「xentacu」「xendacu」いずれをも見出しとしている。そのことによって、当該時期に

二つの語形の存在が認識されていたことがわかる。しかし、このような異語形がもれなく見出しとなっているとは限らない。異語形が存在していてもそれが編集者に認識されていない場合もあろうし、異語形の存在が認識されていても、編集者の何らかの「判断」によって、いずれか一つの語形を見出しとして採用するということも原理的には考え得る。

『日葡辞書』には「Axinato. 1, Axinotori,」（アシマトイ、または、アシモトリ）という見出しがある。語釈には「ある種の細長い虫」⁽²⁾と記されている。「堺本」の「あ部畜類門」に「蟬（振仮名アシマトイ）」とある。いつの時点での書き入れかは不明であるが、「堺本」のこの見出しには「俗ニカマキリノ生ルト／云水中ニ有形／麴ノ黒□長／尺余尤大小有」（□は不明）という書き入れが施されている。「枳園本」においては、漢字列「螟蛸」に「アシマトイ」と振仮名が施され、少し離れて、「蟬（振仮名アシマトイ） 蟪蛄／子也」という見出しがある。これらの記事からすれば、「アシマトイ」「アシモトリ」という虫はカマキリとかかわりがあるものと認識されていたと觉しい。ちなみにいえば、『日本国語大辞典』第二版は見出し「あしまとひ」の語義（二）において「はりがねむし（針金虫）」または「かまきり（蟪蛄）」の異名」と説明している。『時代別国語大辞典 室町時代編 一』（一九八五年、三省堂）の見出し「あしまとひ」の語釈には「線形目の水棲円形動物、針金虫」と記されている。ハリガネムシはカマキリなどの昆虫に寄生する黒っぽい虫で、長いものでは九十センチメートルにもなる、細い紐状の形態をなし、最終的には寄生した昆虫から出て、水中で産卵する。

さて、「原刻易林本」の「あ部氣形門」には「蟬（振仮名アシマドヒ）」とあり、ここに「アシマドヒ」という第四拍が濁音になっている語形がみられる。『日本国語大辞典』第二版は「あしまとひ」を見出しにし、「（「あしまどい」とも）」という、いわば注記を施す。『時代別国語大辞典 室町時代編 一』も同様で、「あしまとひ」を見出しとし、見出し直下に「「あしまどひ」とも」と記している。古本節用集諸本で、「原刻易林本」以外には第四拍に

濁点を附し、当該拍が濁音であることを明示した例を掲げているものはない。当該語に関しては、はっきりと濁点を附している文献があるにもかかわらず、『日本国語大辞典』『時代別国語大辞典 室町時代編 一』が、なお「あしまとひ／あしまとひ」という第四拍清音形を見出しにするのは、『日葡辞書』が濁音形をあげていないからではないかと憶測する。そうであれば、そうした「判断」には『日葡辞書』の「ありかた」が大きな影響を与えていることになる⁽³⁾。

語形の清濁ということを離れるが、『日葡辞書』は「アシモトリ」という語形があることを示している。しかし、『日本国語大辞典』はこの「アシモトリ」を見出しとしない。また、『饅頭屋本初刊本・重刊本』の「あ部」には「蟬（振仮名アシマ）」とある。この「アシマ」に何らかの過誤がないとすれば、「アシマ」は「アシマトイ」の省略語形を思わせる。そこまでを含めて考えることにして、ひとまずは『日葡辞書』がまず示した「アシモトリ」を標準語形とみることにする。当該時期、標準語形「アシマトイ」の周囲には、やや標準的でない「アシモトリ」があり、「アシマトイ」の異語形として「アシマドイ」があった。さらには「アシマトイ」の省略語形としての「アシマ」もあった。これら「アシマトイ」「アシモトリ」「アシマドイ」「アシマ」四語形のうち、『日葡辞書』は「アシマトイ」「アシモトリ」の二つの語形の存在を示した。一方、節用集は「アシマドイ」「アシマ」二つの語形の存在を示した。「堺本」の振仮名「アシマトイ」が第四拍が清音であることを示しているのであれば、節用集は「アシマトイ」を含めた三つの語形の存在を示していることになる。

『日葡辞書』『補遺』に見出し「Ichixiru」（イチシルイ）「Ichixiru」（イチシルー）がある。前者の語釈は「周知の、明白な（こと）」、後者の語釈は「明らかで、明白に」と記されているので、現在であれば「イチジルシイ」と発音する和語の形容詞に相当する語であることは明かであろう。

『時代別国語大辞典 室町時代編 一』は（『日葡辞書』の記事を軸にすえていると憶測するが）「いちしるし」

を見出しにして見出し直下に「いちじるし」とも」と注記する。一方、『日本国語大辞典』は見出し「いちじるし」をたて、「語誌」欄において、「いちしろし」が古い形とされる。中古以降「いちしろし」の語形が中心となるが、『観智院本名義抄』には「いちしろし」の例もある（↓いちしろし（著））。中世に入って、第三音節の濁音化した「いちじるし」やシク活用化した例も見られるようになるが、『日葡辞書』にあるような清音でク活用の形が最も普通の言い方であったか」と述べている。また「発音」欄では「平安頃まで「いちしろし」と清音らしい。中世・近世は「いちしろし」「いちじるし」の両様か」と述べている。見出し「いちしろし」もたてている。

「南葵文庫本」の「い部言語数量門」には見出し「掲焉（振仮名イチジルシ）〔明白義史記／文選用此字〕」があり、振仮名には「イチジルシ」とある。「永禄二年本」の「い部言語進退門」にも見出し「掲焉（振仮名イチジルシ）〔明白義也史記文選用此字〕」がある。つまり、『日葡辞書』は「イチシルイ」という語形のみを見出しとしているが、節用集には振仮名「イチジルシ」がみられる。この語に関しては、『日葡辞書』は第三拍が濁音である「イチジルシ」を見出しとしておらず、そういうこともある、とみておく必要があることがわかる。

『日葡辞書』に見出し「Cauro」（カワロー）がある。語釈には「猿に似た一種の獣で、川の中に棲み、人間と同じような手足をもっているもの」とあって、「永禄二年本」の「か部畜類門」の見出し「獺（振仮名カハウソ）」の語釈「老テ成河童（振仮名カハラウ）ト」にみえる「河童（振仮名カハラウ）」に該当する語と思われる。ところが「兩足院本」の同様の箇所には「ガハラウ」と振仮名が施されている。この振仮名に過誤がないとすれば、当該時期に「カワロー」の他に第一拍が濁音である「ガワロー」という語形が存在していたことになる。『日葡辞書』はこの「ガワロー」を見出しとしていない。また「南葵文庫本」「徳遊寺本」の同様の箇所には「カワラ」と振仮名が施され、「小汀本」には「カハラウ」と振仮名が施されている。これら三本の当該箇所に過誤がないとすれば、「カワロー」「ガワロー」の他に「カワラ」「カワワロー」という語形があったことになる。

『日本国語大辞典』は「かわろう」を見出しとし、見出し直下に「(「がわろう」とも)」と注記する。『日本国語大辞典』は元和版『下学集』の「鰯(振仮名かカワウソ)」「老而成／河童(ガワラウ)」を使用例としてあげている。

節用集の記事は『下学集』をうけてのものであることがわかるが、ここに「ガワロー」がみえている。『日本国語大辞典』は『下学集』に第一拍濁音形「ガワロー」が使われていることを承知しながら、なお、『日葡辞書』が見出しとする第一拍清音形「カワロー」を見出しとして、「とも」という注記を附して「ガワロー」を示す。これは『日葡辞書』によって、見出しの清濁を決めているようにみえるが、仮名書き語形よりもアルファベットで綴られた語形を重視するという「心性」のあらわれではないだろうか。そしてその「心性」は『日本国語大辞典』に留まらない可能性があるのではないか。

『日葡辞書』に見出し「Caraficu」(カラヒツ)がある。語釈には「大箱」とあるので、「永禄二年本」の「か部財宝門」の見出し「唐櫃(振仮名カラヒツ)」に該当する語と思われる。「南葵文庫本」の同様の箇所には「カラビツ」と振仮名が施されていて、第三拍濁音形があることがわかる。

『日葡辞書』に見出し「Ganxei」(ガンセイ)がある。語釈には「マナコ ヒトミ 眼の瞳」とある。「南葵文庫本」の「か部支体門」にみえる見出し「眼睛(振仮名ガンセイ)」に該当する語と思われる。一方、「両足院本」の同様の箇所には「ガンゼイ」と振仮名が施されており、第三拍濁音形が存在したか。

『日葡辞書』に見出し「Qinqi」(キンキ)がある。語釈には「禁じられている物、または、ある人が自分の胃や健康に害があるために避けている物」とあって、漢語「キンキ(禁忌)」と思われる。「南葵文庫本」の「き部言語進退門」に「禁忌(振仮名キンキ)」がみえる。その一方で、「永禄二年本」の同様の箇所には「キンギ」と振仮名が施されている。このことからすれば、第三拍濁音形「キンギ」が存在したか。

『日葡辞書』には見出し「Cumadaca, I, Cumataca」(クマダカ、または、クマタカ)と見出し「Cumataca」(クマ

タカ」とがある。語釈はいずれも「蒼鷹の一種、あるいは、大きな鷹」とあって、「クマタカ（熊鷹）」に該当する見出しと思われる。二つの見出しをたてている理由は判然としないが、当該時期に「クマダカ」「クマタカ」二つの語形が併存していたことが窺われる。「南葵文庫本」の「く部畜類門」には見出し「鵬（振仮名クマタカ）」がある。「永禄二年本」「堯空本」「両足院本」の同様の箇所にも「クマタカ」と振仮名が施されており、第三拍に濁点を附していない。片仮名で「クマタカ」と書かれている語は、「クマタカ」「クマダカ」いずれの可能性もあるとみるのが一般的であるが、『日葡辞書』が第三拍清音形「クマタカ」も独立した見出しとしていることからすれば、片仮名「クマタカ」が第三拍清音形「クマタカ」と対応している可能性もある。

『日葡辞書』に見出し「Curigana」（クリガナ）があり、語釈には「大工が滑らかに削るのに使う刃物の一種」と記されている。また「補遺」にはやはり見出し「Curigana」が置かれ、その語釈には「何かに孔をくりぬくために、たとえば、笛などのように、内側を円く中空にするために使う刃物の一種」と記されている。

「永禄二年本」の「く部財宝門」には見出し「曲鉦（振仮名クリカナ）」がある。「堺本」「南葵文庫本」の同様の箇所には「クリガンナ」「両足院本」「堯空本」の同様の箇所には「クリカンナ」と振仮名が施されている。「クリガナ」が「クリガンナ」からうまれたことは明かで、少なくとも「クリガンナ」「クリガナ」二つの語形があったことは認めてよいと考える。『日本国語大辞典』は見出し「くりがな」をたて、見出し直下で「くりがんな（刳鉦）」の変化した語であると説明する。しかし「くりがんな」を見出しにしない。複数の節用集に振仮名「クリガンナ」がみえるにもかかわらず、この語形を見出しとして採らない理由は、（憶測になるが）やはり『日葡辞書』が「クリガナ」のみを見出しにしていることに起因するのではないだろうか。

『日葡辞書』に見出し「Qenjen」（ケンゼン）がある。語釈には「明白なこと」と記されているので、漢語「ケンゼン（顕然）」に該当する見出しと思われる。「南葵文庫本」「け部言語進退門」に見出し「顕然（振仮名ケンゼン）」

がみられる。「堯空本」の同様の箇所にも振仮名「ケンゼン」が施されている。一方、「永禄二年本」の「け部言語門」には見出し「顯然（振仮名ゲンゼン）」がある。「顯」には「ケン」「ゲン」二つの音があり、「ゲンゼン」はあり得る語形といえよう。

『日葡辞書』に「Cöxen」（ローセン）という見出しがある。語釈には「すなわち、サンガチ。日本の「陰曆」三月の名」と記されている。「Coxen」（コセン）の誤りと考えられている。「南葵文庫本」の「こ部時節門」には「姑洗（振仮名コセン）」「唐三月／異名」、附録「六律」にも「姑洗（振仮名コセン）三月」とある。「永禄二年本」の「こ部時節門」には「姑洗（振仮名コセイ）」とあって、右には「コセイ」と振仮名が施されている。漢字列「姑洗」の「洗」字の左側には「セイ」と振仮名が施され、「永禄二年本」は「コセイ」「コセン」二つの振仮名を示す。「堯空本」の「こ部時節門」にも「姑洗（振仮名コセイ）」とある。三卷本『色葉字類抄』「こ篇疊字部」にも「姑洗」「三月名／コセン」とある。「洗」字には「セイ」「セン」二つの音があり、「コセイ（姑洗）」はあり得る語形であったといえよう。ただし『日本国語大辞典』も『時代別国語大辞典 室町時代編』も「コセイ」を見出しにしない。

「永禄二年本」の「は部人倫門」には見出し「把針（振仮名ハシン） 洗衣（振仮名セイエ）」があり、さらに「せ部人倫門」には見出し「洗衣（振仮名セイエ） 把針（振仮名ハシン） 者」がある。「南葵文庫本」の「せ部人倫門」には「洗衣（振仮名セイエ） 把針」とある。『塵芥』には見出し「把衣（振仮名ハシン） 洗衣、見出し「把針（振仮名ハシン）」「衣裳／ヲヌフ／也」があり、『日葡辞書』は見出し「Faxinja」（ハシンジャ）を「仕立屋、または、裁縫女」と説明している。「明応本」の「せ部人倫門」には見出し「洗衣（振仮名セイエ）」「把針／之人」がみえており、「セイエ（洗衣）」は「ハシン（把針）」とともに使われる語であったことが推測され、「洗」字を「セイ」と発音する漢語が使われていたことがわかる。

『日葡辞書』には見出し「Conzat（コンザツ）」があり、語釈には「入りまじること」とある。また「補遺」には

見出し「Conzo」（コンゾー）があり、やはり語釈には「入りまじること」とある。「南葵文庫本」の「こ部言語進退門」には「混雑（振仮名×サツ）」とある。「永禄二年本」の「こ部言語門」においては見出し「混乱（振仮名コンラン）」の下に「一雑（振仮名ザウ）」とある。「一」には「混（コン）」が入るとみるのが自然で、ここに「コンゾー（混雑）」という語形がみられることになる。当該時期、漢語「混雑」にかかわる語形としては「コンザツ」「コンゾー」二つの語形が併存していたと思われるが、それが『日葡辞書』にも節用集にもみられる例ということになる。

『日葡辞書』には見出し「Tcububuxi」（ツブブシ）があり、語釈には「膝の皿 膝蓋骨」。ただし、一般の庶民は「Tcubuxi（ツブシ）」と言う」とある。また別に見出し「Tcubuxi」もあり、そこでは「上の条 [Tcububuxi] に同じ。下 (X.) の語」と説明されている。さらには見出し「Tcucubuxi, Tcububuxi」（ツクブシ。または、ツブブシ）もあり、それぞれの語のかかわりは措くが、「ツブブシ」「ツブシ」「ツクブシ」という語形があったことがわかる。節用集においては、「南葵文庫本」の「つ部支体門」に見出し「踝（振仮名ツブ、シ）跟（右同）」とある。その一方で、「堯空本」の同様の箇所には振仮名「ツブシ」が施されている。振仮名「ツブ、シ」を「ツブブシ」という語形を書いたものとみれば、節用集の振仮名には「ツブブシ」「ツブシ」「ツブシ」二語形を見いだすことができる。

『日葡辞書』には見出し「Sangue」（サンゲ）があり、語釈には「はぢくやむ。懺悔し告白すること」と記されている。「南葵文庫本」の「さ部言語進退門」には「懺悔（振仮名サンゲ）」とある。その一方で、「永禄二年本」の「さ部言語門」、「吉沢文庫本」の「さ部言行門」には「懺悔（振仮名サンゲ）」とある。したがって、当該時期には「サンゲ」「ザンゲ」二つの語形が併存していたと思われるが、『日葡辞書』は「サンゲ」のみを見出しにしていることになる。

『日葡辞書』には見出し「Iacuro, I, zacuro」（ジャクロ。または、ザクロ）、「Iacurono qi」（ジャクロノキ）、「Iacurozaca」

（ジャクロザカ（石榴鶏冠）がある。見出しからすると、「ジャクロ」「ザクロ」二つの語形があつて、前者が当該時期の標準語形であることが窺われる。「南葵文庫本」の「し部草木門」に見出し「石榴（振仮名ジャクロ）」「尔雅翼／或作若榴」がみえる。「永禄二年本」の「し部草木門」には見出し「石榴（振仮名ジャクロ）」「取汁入盃中／経数日成美酒」があり、「堯空本」の同様の箇所には「シヤクロ」と振仮名が施されている。つまり節用集の振仮名には「ジャクロ／シヤクロ」しかみられない。三卷本『色葉字類抄』の「さ篇植物部」には「楷榴 サクロ 栢榴 同」とあり、語形「ザクロ」がまずあつたと思われる。しかし、節用集はその、もともとのかたちを振仮名にしない。

二 長音をめぐる語形について

『日葡辞書』「補遺」に見出し「Yoga」（オガ）「Yogaŋi」（オガヒキ）がある。前者の語釈には「木を挽く大きな鋸」、後者の語釈には「木挽き」と記されている。「南葵文庫本」「両足院本」の「を部財宝門」には見出し「大鋸（振仮名ヲガ）」がある。また「堯空本」の「を部人倫門」には見出し「大鋸引（ヲガヒキ）」がある。一方、「永禄二年本」の「を部財宝門」の見出し「大鋸」には「ヲ、ガ」と振仮名が施されている。「ヲ、ガ」は「オオガ」または「オーガ」という語形を書いたものとみるのが自然であろう。「オオガ／オーガ」の変異語形が「オガ」であることははっきりしており、「オガ」は「オオガ」の母音脱落形、または「オーガ」の短呼形ということになる。『日葡辞書』はそもそもの語形である「オオガ／オーガ」を見出しにしていない。

『日葡辞書』に見出し「Cōju」（コージュ）がある。語釈には「口入れ 仲介すること、または、人のために口をきいてやること」と記されている。「南葵文庫本」の「こ部言語進退門」には「口入（振仮名コウジュ）」があり、「堯空本」の同様の箇所には「口入（振仮名コウシュ）」がある。その一方で「永禄二年本」の同様の箇所には「口

入（振仮名コウジュウ）とある。「コウジュウ」は第四拍が長音である「コージュー」を書いたものとみるのが自然で、そうであれば、「コージュ」からみた場合）当該時期には長音形とみなし得るような語形が存在した可能性を考えてよいことになる。

『日葡辞書』に見出し「Zao」（ザコ）がある。語釈には「一緒にまとめて売られるたぐさんの小魚」と記されている。「南葵文庫本」の「さ部畜類門」には「雑喉（振仮名ザコ）小魚 榮螺（振仮名サミイ）雑魚〔異本／在之〕」とある。「永禄二年本」の「さ部畜類門」には「雑喉（振仮名ザコ）〔小魚／雑魚（振仮名サウコ）〕」とある。また「和漢通集」の「さ部畜類門」には「雑喉（振仮名ざつこ）小魚」とある。『玉塵抄』十五には「ジャコノヒツマリノ川ゾ。魚ハアツマリツドウ者ナリ」とあり、（現在も使われている）「ジャコ」という語形も室町時代にうまれていたことがわかる。

右に示したように、節用集には漢字列「雑喉」がみられるが、『日本国語大辞典』は見出し「ざこ」の「語誌」欄において、「（一）語源はザフコウ（雑喉）がザツコウ、ザコと変化したとする説が一般化しているが、確証は無い。「ジャ（ザ）」は「ウジャウジャ」などの擬声擬態の「ジャ」、「コ」は「子（小）」で、純粹な和語の口頭語と考えることもできる。そうだとすると、挙例の「名語記」などにみられる「雑魚」の表記は、当て字と考えられる。さらにくだって、室町時代、「雑喉」の表記が見られるが、これも新しい当て字とみるべきと思われる。また、現在の方言形に残る「ザツコ」も、「雑喉」と当てられた後の出現であろう。（二）漢籍には「雑魚」「雑喉」という語は見出せないため、漢語を起源とするとは考え難い」と述べる。漢字列「雑魚」「雑喉」に対応する漢語が存在しないのであれば、これらの漢字列は和語にあてられたもの、ということになる。「永禄二年本」の振仮名「サウコ」がいかなる語をあらわしているか、ということになるが、「ザコ」を一方におき、「サウ」が長音をあらわしているとみれば、「ゾーコ」という語形が考えられる。「ザコ」に促音がわりこんだものが「ザツコ」で、「ザ」が拗音化

したものが「ジャコ」で、こうした幾つかの変異形がうまれていた。しかし『日葡辞書』は「ザコ」のみを見出しにしている。

『日葡辞書』に見出し「Chubu」（チューブ）がある。語釈には「中風の病気にかかっている」とある。また見出し「Chubage」（チューブケ）もあり、語釈には「中風の病気」とある。「永禄二年本」「堯空本」の「ち部支体門」には見出し「中風（振仮名チウブ）」がある。一方、「両足院本」の同様の箇所には見出し「中風（振仮名チウブウ）」がある。振仮名「チウブ」は「チューブ」に対応するであろうが、振仮名「チウブウ」は「チューブ」をあらわしているのとみるのが自然であろう。この語形を『日葡辞書』は見出しにしていない。

『日葡辞書』「補遺」に見出し「Doxi」（ドン）、「Tocodoxi」（イトコトシ）、「Tomodoxi」（トモドシ）もある。また見出し「Doxi」（ドン）、「Tocodoxi」（イトコトシ）、「Tomodoxi」（トモドシ）もある。

「鰻頭屋本初刊本」の「と部言語門」には見出し「同士軍（振仮名トシイクサ）」がある。一方、「広本」の「と部」には見出し「（同・振仮名トウ）士軍（振仮名シイクサ）或作等士（振仮名トウシ）」があり、また「永禄二年本」の「と部言語門」には見出し「同士軍（振仮名トウシイクサ）」がある。節用集の振仮名には「トシイクサ」「ドウシイクサ」二つの語形がみられるが、『日葡辞書』は「トシイクサ」のみを見出しにしている。

『日葡辞書』には見出し「Toro」（トロー）がある。語釈には「灯籠」と記されている。その他「アゲドロー」「カゲドロー」「カナドロー」「イシドロー」「マワリドロー」などが見出しになっているが、『日葡辞書』は「トロー／＼ドロー」を見出しとしている。「永禄二年本」の「と部財宝門」に見出し「燈籠（振仮名トウロ）」「或作／＼灯楼」があり、振仮名「トウロ」は「トロー」をあらわしていると思われる。一方、「南葵文庫本」の「あ部財宝門」に見出し「行燈（振仮名アンドン）灯籠（振仮名トウロウ）」があり、「堯空本」の「と部財宝門」には「燈籠（振仮名トウロウ）」「又／＼楼」の同様の箇所には「燈籠（振仮名トウロウ）」「又／＼楼」とある。振仮名「ト

ウロウ」は「トーロー」に対応するものとみるのが自然であろう。「トーロ」「トーロー」二つの語形のうち、『日葡辞書』は前者のみを見出しとしている。

『日葡辞書』には見出し「Docuro」（ドクロ）がある。語釈には「シヤリコウベ 髑髏」と記されている。「永禄二年本」の「と部支体門」に見出し「髑髏（振仮名ドクロ）首骨也」とある。「堯空本」の同様の箇所には「ドクロウ」と振仮名が施されている。振仮名「ドクロウ」は「ドクロー」に対応するものと思われる。したがって、当該時期には「ドクロ」「ドクロー」二つの語形があった可能性があろう。

『日葡辞書』には見出し「Tozamaxu」（トザマシユ）がある。語釈には「主君のもとに居なかつたり、遠隔の地に居たりして、ある主君に仕える者」と記されている。「永禄二年本」の「と部人倫門」に見出し「外様衆（振仮名トザマシユ）」がある。一方、「南葵文庫本」の同様の箇所には「トサマシウ」、「両足院本」の同様の箇所には「トサマシユウ」と振仮名が施されている。これらは書き方は異なるが、両者とも「トザマシユー」を書いたものと思われる。そうであれば、当該時期には「トザマシユ」「トザマシユー」二つの語形があり、『日葡辞書』はそのうちの一つの語形を見出しにしていることになる。

『日葡辞書』には見出し「Tojan. 1. tojenna」（トゼン。または、トゼンナ）がある。語釈には「ひとりぼっちで寂しくして居る（こと）」と記されている。「永禄二年本」の「と部言語門」には見出し「徒然（右振仮名ツレ／＼左振仮名トゼン）」がある。一方、「南葵文庫本」の「と部言語進退門」には見出し「徒然（振仮名トウゼン）」がある。振仮名「トウゼン」は「トーゼン」を書いたものとみるのが自然で、そうであれば、「トゼン」「トーゼン」二つの語形があったことになる。

『日葡辞書』には見出し「Nōju」（ノージュ）がある。語釈には「ある事が神や仏に喜ばれ、または、祈願などが受け入れられること」と記されている。「両足院本」の「な部言語門」に見出し「納受（振仮名ナフジユ）」があ

る。「堯空本」の同様の箇所には「納受(振仮名ナウジュ)」とある。これらの振仮名「ナフジュ」「ナウジュ」は「ノージュ」を書いたものと思われる。一方、「永禄二年本」の「な部言語門」には見出し「納受(振仮名ナウジュウ)」がある。振仮名「ナウジュウ」は「ノージュー」を書いたものと思われる、当該時期に「ノージュ」「ノージュー」二つの語形があったと思われる。

ここまでみてきたように、まず、当該時期には、長音を含んだ語形Xと、その語形Xから長音を除いた、Xの短呼形Yとが併存していたことを推測させる例が存在する。「併存」は『日葡辞書』に両語形が何らかのかたちで載せられている、あるいは節用集の振仮名に両語形がみられる、ことをもって「併存」とひとまず呼んだ。片方の語形がそもそもの語形で、そのことが漢字列を媒介にすることによって、いついかなる時でも明かである場合などもありそうで、そうした場合には厳密に言えば、両語形が並び用いられていたことにはならない。そもそも何らかの過誤によって生じた語形でないことの証明が難しい場合もある。そうした意味合いにおいて、一つ一つの例については、今後もさらに検討する必要があるが、大枠としてみれば、先に述べたようなXとYとが併存している場合が少なくない。そして、『日葡辞書』が両語形を見出しにしていることももちろんあるが、どちらかといえば、節用集の振仮名に両語形があらわれていることが多い。そのことは、XとYとのいずれかが「臨時的な語形」にちかいものであることを思わせもするが、『日葡辞書』が見出しとしない変異形が少なからず存在していたことは指摘できたと考える。

三 その他の変異形について

『日葡辞書』には見出し「Tobiuno, i, tobiuno」(トビイオ、または、トビウオ)がある。「永禄二年本」の「と部畜類門」には見出し「F(振仮名トビイヲ)」「(Fは魚×先)」があり、「南葵文庫本」の同様の箇所には振仮名「ト

ヒウヲ」が施されている。振仮名「トビイヲ」は「トビイオ」を、振仮名「トヒウヲ」は「トビウオ」を書いたものとみるのが自然であろう。一方、「堯空本」「両足院本」の同様の箇所には「トビヲ」と振仮名が施されている。振仮名「トビヲ」は「トビオ」という語形を書いたものと思われる。『和名類聚抄』は見出し「鰯」に和名「止比乎」（トヒヲ）を配しており、『和名類聚抄』が編まれた十世紀に「トビオ」という語形があったことがわかる。「トビイオ」あるいは「トビウオ」から母音が脱落したかたちが「トビオ」であるはずで、『和名類聚抄』にみえる「トヒヲ」の位置づけが難しい。節用集の振仮名は「かつてあった語形」を書いたものであるか、あるいは節用集が編まれた時期に「トビイオ／トビウオ」からさらに母音を脱落させた語形が生まれ、それを書いたものか、いずれにしても、この「トビオ」が『日葡辞書』にはみられない。

右は母音にかかわる事象といえるが、撥音にかかわる事象も散見する。「堯空本」の「し部言語門」には見出し「深雪（振仮名シセツ）」がある。「原刻易林本」の同様の箇所には「シンセツ」と振仮名が施されている。あるいは「永禄二年本」の「せ部官名門」には見出し「少納言（振仮名セウナンゴン）」がある。「シンセツ（深雪）」からみれば「シセツ」は撥音が脱落した語形、「シヨウナゴン（少納言）」からみれば、「セウナンゴン」は撥音が加わった語形ということになる。

また『日葡辞書』には見出し「Vdon」（ウドン）があり、語釈には「小麦粉を捏ねて非常に細く薄く作り、煮たもので、素麺、あるいは切麦のような食物の一種」と記されている。また、見出し「Vndon」（ウンドン）もあり、語釈には「ただし、ウドンと発音される。上のその条を見よ」と記されている。「ただし、ウドンと発音される」をどのようにとらえるかということになるが、「堯空本」の「う部食物門」には見出し「温鈍（振仮名ウトン）」「又作／鰻——」があり、「永禄二年本」の同じ箇所には「ウンドン」と振仮名が施されている。したがって、『日葡辞書』が掲げている見出し「ウドン」「ウンドン」はともに節用集の振仮名に見いだすことができる。

あるいはまた、「南葵文庫本」の「こ部草木門」には「昆若（右振仮名コンニヤク）蒟蒻（右同／左振仮名コンニヤク）」とあって、連続した見出しの右振仮名に「コンニヤク」、左振仮名に「コンニヤク」がみえる。『日葡辞書』には見出し「Conhacu」（コンニヤク）のみがみえる。『和名類聚抄』の見出し「蒟蒻」に配された和名「古迹夜久」を「コンニヤク」とみれば、「南葵文庫本」の「コンニヤク」はそれと重なる。三卷本『色葉字類抄』の「こ篇植物部」において見出し「蒟蒻」の直下にも「コンニヤク」とある。そのことからすれば、当該時期に「コンニヤク」「コンニヤク」が併存していない可能性も考えておく必要があるが、ひとまずは節用集の振仮名に二つの語形がみえることを指摘しておきたい。

おわりに

「はじめに」においても述べたが、『日葡辞書』は見出しをアルファベットで文字化している。アルファベットによる文字化は、漢字や仮名による文字化では判然としない、語の形、就中いわゆる「清濁」を結果として明示する。『日葡辞書』は、室町時代頃の日本語の「清濁」に関して考えるにあたって重要な文献といつてよい。しかしそのために、過剰に『日葡辞書』によりかかった「判断」が無意識裡になされているということはないだろうか。

本稿では、一つの語をめぐって複数の変異形がある場合について、「清濁」「長音」にかかわる場合を主に採りあげて論じた。『日葡辞書』がつねに「複数の変異形」を見出しとして採りあげているわけではないことはいうまでもないが、そうしたことを具体的に指摘した。

本稿では、『日葡辞書』と古本節用集の諸テキストを対照するかたちで考察を進めた。古本節用集の見出しは漢字列で、それに振仮名が施されている。古本節用集の多くは写本のかたちで伝わっており、そのことからすれば、（版本以外の）古本節用集には書写原本があることになる。振仮名もひとまずは書写されて継承されていくと思わ

れる一方で、古本節用集の諸テキスト全体をみわたせば、さまざまな振仮名が施されているともいえよう。それは、時に、書写者がいわば「主体的に」振仮名を施すためと考えるのがもつとも自然であろう。見出しが漢字列であるとすれば、古本節用集は「書きことば」という枠組みの中にあることになる。しかし、検索のキーとして振仮名を施すにあたっては、「書きことば」では使われていない語形や「書きことば」ではあっても、「標準語形」からはなにはどうか「距離」のある語形を振仮名とすることもあった、と考える。本稿においては、そうしたなにはどうか非標準的な語形を『日葡辞書』、古本節用集にどのようにみいだすことができるか、という点について考察した。古本節用集の振仮名を丁寧に吟味することによって、さまざまな変異語形が存在していたことを推測することができる。そして、『日葡辞書』と古本節用集とを併せ用いることによって、より精密な分析が可能になることを示し得たと考える。

註

- (1) 尊経閣善本影印集成『節用集 黒本本』(一九九九年、八木書店)「解説」内に掲げられている「部門別項目数表」に基づいて算出した。
- (2) 『日葡辞書』の語釈は、原則的に土井忠生、森田武、長南実編訳『邦訳日葡辞書』(一九八〇年、岩波書店)に従う。
- (3) 『日本国語大辞典』は、「アシタカグモ」に関しては、『日葡辞書』が見出し「*Axillacagumo*」(アシタカグモ)を掲げているにもかかわらず、「あしたかぐも」を見出しとし、見出し直下で「(「あしたかぐも」とも)」と注記する。『時代別国語大辞典』にもかわらず、「あしたかぐも」を見出しにしている。古本節用集には「アシタカグモ」という振仮名はみられないと思われる。また『日本国語大辞典』は「いたけだか」を見出しとして、見出し直下に「(「いだけだか」「いだけたか」とも)」と注記する。『日葡辞書』は「*Idagedaca*」(イタケダカ)を見出しとし、その他の語形を見出しにしていない。『時代別国語大辞典 室町時代編 五』は「ゐだけだか」を見出しにしている。「草間直方本」の「い部言語数量門」には「居長高(振仮名イタケダカ)」とあり、『日葡辞書』の見出しと一致する。「両足院本」の「い部言語門」には「居長高(振仮名イタケダカ)」

とあり、「南葵文庫本」の「い部言語数量門」には「居長高（振仮名イタケタカ）」とある。しかし、これらの振仮名「イタケタカ」「イダケタカ」をもつて、ただちに「イタケタカ」「イダケタカ」という語形が存在が証明されたことにはならないことはいうまでもなく、先の例とも合わせ、『日本国語大辞典』の「とも」がどのようなことさらに根拠としてどのような場合に附されているかについて「凡例」には記されていないと思われる。振仮名「イタケタカ」「イダケタカ」がともに「イタケタカ」を書いたものとすれば、一語に二箇所ある濁音拍のいずれか一方にしか濁点を附していない例ということになる。そうしたことがあるかどうかということについても考えておく必要がある。例えば、『日葡辞書』『補遺』には見出し「Gôbucu」（ゴーブク）がみられる。「永禄二年本」の「か部言語門」には見出し「降伏（振仮名カウブク）」が、「南葵文庫本」の「か部言語進退門」には見出し「降伏（振仮名ガウフク）」がみられる。これらの振仮名「カウブク」「ガウフク」がいずれも「ゴーブク」を書いたものとすれば、一語に二箇所ある濁音拍のいずれか一方にしか濁点を附していない例に該当することになる。

“Setsuyo-shu” and “Nippo-jisho”

KONNO Shinji

Abstract “Setsuyo-shu” is a Japanese dictionary that was completed in mid-Muromachi period, and “Nippo-jisho” is a Japanese dictionary completed in 1603. The two dictionaries have been used frequently to analyze the Japanese language of the Muromachi period. The word entries of “Setsuyo-shu” were written in kanji (Chinese characters) that are often attached with Japanese syllabaries. The word entries of “Nippo-jisho” were written in alphabetical order, interpreted in medieval Portuguese.

Since the entries of “Nippo-jisho” were written in alphabet letters, it was possible to know the pronunciation of the Japanese words, unlike words written in Chinese characters or Japanese syllabaries. For example, if the Chinese character 「洗濯」 is written, the pronunciation of the word is unknown. However, if the word is written in the Jesuit form of alphabet “xendacu,” then the pronunciation “sentaku” would be clear. Because of this, in the analysis of the Japanese language during the Muromachi period, there is a possibility that the “Nippo-jisho” was the best well-grounded choice.

There are standard kinds of word forms and nonstandard kinds of word forms. In this paper, a model in which some nonstandard kinds of word forms surround the standard kinds of word forms was approached. The fact that not all of these nonstandard kinds of word forms were used as entry words in the “Nippo-jisho” is specifically indicated by comparing the entry words in the “Setsuyo-shu.”

Several nonstandard kinds of words often appear in the “Setsuyo-shu.” The observation of the Japanese language during the Muromachi period will be made more precise with the use of “Nippo-jisho” and by placing the complete “Setsuyo-shu” as a document that reflects the “sway” of a language.

Key words: Standard form, Non-standard form, Writing language